

児童健全育成賞 佳作

ほしかったのは豊かな日常

—育ち合う子どもたちと地域とともに。新設児童館9年の歩み—

新潟県新潟市

岩室地域児童館 館長 川 邊 素 子

1. はじめに

岩室地域児童館は新潟市の端、西蒲区岩室地区という越後平野の広がる人口1万人に満たない小さな地域に平成27年(2015)に開館した。

放課後児童クラブを持たない小型児童館で、指定管理者制度により民間企業が運営を受託し、午前9:00～午後7:00まで年間359日開館している。現在では、乳幼児から高校生まで1日平均60名、多い日では100名を超える利用がある。地域ボランティアによる子ども食堂や学習支援、若者世代からの協力もあり、多世代が交流する場としても活用されている。

そんな岩室地域児童館だが、それまで区内には児童館が1館もなく、開館当初は児童館がどのような施設か認識が薄い状況であった。子育て支援センターでも放課後児童クラブでもない、そもそもの認知度が低い「児童館」という施設を、子どもや地域住民も、そしてわたしたちもどのような場所にしていけばいいのか、戸惑いを抱えながらのスタートだった。それから9年。新設児童館が子どもの居場所になるまでの経緯と児童館の歩み、それに伴って変わっていく地域の様子について報告する。

2. 「先生、これ終わったら遊んでいい？」

まだ開館前の平成27年(2015)3月、子どもたちはここに何ができるのかと準備の様子を見に来ていた。それだけ強い期待があったの

だと思う。そして同年4月、開館を迎えると児童館自体が珍しく、黙っていても集まってくる子どもたちの様子に達成感を感じる日々であった。

その頃の運営は、週末には行事を、平日には「〇〇の日」と設定して予定を詰め込み、それらに参加してもらうことに満足していた。しかし当時必ず言われていた言葉は「先生、これ終わったら遊んでもいい？」である。当時この言葉に違和感を感じながらも気に止めなかった。行事をしてこそ児童館、健全育成事業をしているのだから参加しているうちに楽しくなるはずという考え方に捉われていたわたしたちは、遊びの主体である子どもたちを「遊ばされている」状態にしていたのだ。子どもを行事に参加させ、企画運営することに満足するような日々を送っていた。

3. 子どもたちの声と行動

開館して半年を過ぎた平成27年(2015)10月頃、毎日児童館に来る小学校2年生と4年生の子どもたちがわたしに言った。「行事に参加しなければ児童館に来ちゃいけないの?」「ゲームもおやつもあれもこれもダメなんてつまらないところ」、中には手紙を書いてくる子どももいた。前述した「先生、これ終わったら遊んでもいい?」が、より核心をついてぶつけられるようになったのだ。

しかしわたしは、それがルールなのだから仕

方ない、としか答えられなかった。でも子どもたちは児童館には来てくれていた。ただそれは、職員の話は聞かずやりたいことをやる、ルールを無視して強行突破するというやり方であった。

真剣に叱ることができず、ルールをはっきりと示せないのは、職員たち自身が今のやり方に違和感を抱いているからなのではないか、とわたしはそう感じていた。ゲームやおやつくらい許してもいいのではないか、公共施設である児童館として秩序を保たなければ、という職員間の意見対立を引き起こしていた。悪循環だった。その中でわたしは「地域や保護者からどう見えるか」に気を取られ、職員それぞれの想いに向き合うことができずにいた。ゲームは悪影響が大きいという考えは根強く、また私物の管理はどうするのか、おやつに関しても食べるときのマナーの問題など課題は多く、そして「大人の思う理想のこども像」を守らなければいけないのではないかという思いが強かった。なにより児童館とは何か、明確なものがなかったのだ。この状況を改善するため、他の児童館の取り組みを参考にし、こども会議のメンバーを募って公式な場で意見を言ってもらえばいいのではないかなど、思いつく限りの方法を試してみた。ところがどれもうまくいかず、当たり前でできそうなことが何一つできない自分に苛立ち、こどものことを考えているような顔をして、やっぱり大人からの視線を気にしている自分を持て余していた。

その中で唯一変わらなかったことは子どもたちが来館し続けていたことだ。子どもたちにとっては、職員を怒らせるということさえもわたしたちとのコミュニケーションであり、遊びとして成立していたのだ。

4. 気づきから実践への「覚悟」

子どもたちは意見を言ってくれている、わたしが聞くべき声、見るべきなのは目の前に集まってくる子どもたちではないのか。ここは誰のための場所なのか、誰の声にまずは耳を傾け

なければならないのか。大切なのはこども会議を成功させるといったことではなく、日々児童館に集まるこどもの声を聞くことではないか。子どもたちは館内でゲームができない、おやつが食べられないなら入館せずに玄関前のスペースで集まる、といったように自分たちなりのやり方を編み出していた。子どもたちは児童館に少なからず期待を持っているからこそ、こどもなりのやり方で主張し、自分たちで必死に居場所を作ろうとしていた。そんな子どもたちの様子を連日見ている、今日の前にいる子どもたちに応えることをせずに大人の理想の児童館をこどもに押し付けてはいけない、と気づかされた。わたしたちが優先すべきなのは子どもたちのニーズに応えることだ。外からの見え方を意識しすぎるのではなく、こどもの意見を具現化していくことも児童館の仕事であるはずだ、と覚悟が決まった。児童館とは何か、ということがようやく明確になったのだ。

ここの主役は子どもたちであり、今取り組むべきなのはこうして玄関前に集まってくる子どもたちの「居場所」になることだ。今は荒っぽい子どもたちのやり方、その声をルールにし、子どもたちとの対話の中でつくる居場所の実践がはじまった。

5. 児童館がこどもの居場所になるために

覚悟が決まったと同時にわたしの心は軽くなった。わたしの見つめる先はただ一つ。子どもたちだ。そう思ったら一気に視界が開けたように感じたのを覚えている。

児童館に来続けてほしい、みんなの意見が実現するように一緒にがんばってほしい、ルールをみんなで作ろうと言ったときの子どもたちの期待に満ちたキラキラした表情は忘れられない。その表情には「受け入れられる」うれしさが溢れていたからだ。児童館が子どもたちの居場所になるため、子どもたちと向き合うこと、目的なく来館してもいいのだということ、「こどもはこうあるべき」という固定観念にとらわ

れてはいけない。こどもたちの意見も「できない・させない」から「どうやったらできるか」を一緒に考えていくようにした。

具体的にはゲームなど自分の私物を持ち込みできるように、紛失や破損などに責任は負えないことなどの留意事項を各家庭に配布した。おやつを食べられるよう各児童にアレルギーの聞き取りを実施し、登録票にも記載欄を設けた。アレルギーがある場合は配慮するので知らせてほしいことを広報・周知した。この取り組みについて第三者委員会で話し合いを実施し、理解の促進を図った。そしてこれらの取り組みをどのように呼びかけたら協力してもらえるかをこどもたちとも話し合った。私物を持ってきたらどんなことが想定されるか、何に気をつけるべきかを共に考えた。やりたい遊びも、遊具や物をどのように使うのか、どんな危険やリスクが想定されるのかなども話し合い、職員とこども双方が納得した上でやりたいことにチャレンジできる環境を整えた。

さらに各部屋の使い方や遊具の配置をこどものやりたい遊びに応じ、変更を加えた。たとえば「工作の部屋」と名付けられた部屋を、ものを置かないフリースペースにし、体を動かす遊びもできるように変更するなどである。柔軟に環境を調整することはのちに時代が変わる中でも児童館の運営上欠かせないものとなった。

そうした取り組みを通して、職員は禁止をする人間ではなく一緒に考えてくれる人という信頼関係を築いていった。その中でも困難を感じたことは、自分勝手と自由は違うということをこどもに理解してもらい、主体性を引き出していく関わりである。こどもが自ら考え、判断する支援を行える職員の資質の向上も同時に取り組まなければならなかった。

6. 職員が育てば児童館も育つ

前項でも触れたように、こどもの居場所になるために大きな課題となったのは職員のこどもへの共通理解と児童厚生員としての質の向上である。職員一人ひとりが前職やこれまでの生き

方の中で培った価値観や考えを持っている。そして全員が児童厚生員というわけではなく、専門性が統一されているわけでもない。そのため発言を控える職員も見られ、特定の職員の意見が通ってしまう場面も多く見られていた。この実践は全員で取り掛からなければならない。誰かのスタンドプレーになることは最も避けなければならないことだ。

そのために取り組んだことは「雑談を増やす」である。毎日実施するミーティングの中での報告だけでなく、雑談を通して各職員の考えやこの仕事に就いた背景や想いなどを共有することで個人の能力や資質をより知ることができ、相互理解の促進に大いに役立った。こどもたちの過ごし方についても、「大人が決めたルールの中で活動させるべき」といった固定化した価値観の受容も含めて、なぜその支援が必要なのかを納得して業務についてもらえるように対話を重ねた。職員も環境を構成する大切な資源であることを念頭に置き、職員一人ひとりに寄り添っていくことは不可欠な作業であったと感じている。

研修などで知識量を増やすことはもちろんのことだが、通常業務の中で職員同士が密なコミュニケーションを図り、職員が児童館に定着してこどもたちと安定した関係を構築することは実践において大きく影響すると考えた。

この取り組みにより、記録だけでは伝わりづらいこどもの様子や家庭状況など細かく共有が図られ、常勤以外の職員も発言しやすくなり、よりよい実践を全員で行うことができるようになっていった。時には意見が対立し、修復が困難と感じる場面もあったが、それも実践の上で必要なものであったと感じている。

こどもを取り巻く環境の一つであるわたしたち職員が一体となって場を構成することはこの実践の中で大きな要素になっている。雑談を重ねることで多様な価値観への理解などを含め、聞き取りの力が伸び、保護者からの相談や思春期支援にも役立っていくようになった。

そして、職員育成は館長としての資質が問わ

れると同時に児童館のあり方を決定づける重要な役割であると考えている。

7. 「大人だけで決めないこと」

2年目の平成28年(2016)4月、児童館が変わっていくに従って、こどもたちも変化していった。児童館に行けば何か楽しいことがある、自分のしたいことができる、といった信頼がより大きくなってきた。それは職員とこどもの関係が、日々の対話を通して、人間同士としてのつながりに変化したことで、職員とのかかわり自体が「放課後の過ごし方の一つ」になったからだと感じた。

たとえば、こどもたちが「台車に乗りたい」という本来の使い方と異なる遊びを提案したとしても、まずは職員が乗って見せ、どのように見えたか、どんなことに気づいたか、代替できる遊びはないかというように客観的に遊びを見て、判断を促すのである。行事を行うときも必ずこどもの意見を反映させ、どのように企画運営したらいいかを共有した。当日も運営にこどもが参加し、行事がこどもたちの手の中にあるように働きかけていった。どの子も意見を言えるように職員との雑談の中で行事のやり方について話し合っていた。こどもの意見聴取の手法の一つとして雑談力は大いに力を発揮した。そして行事後にこどもたちと必ず振り返りを行うようになった。それによりこどもたちも行事の中の課題を発見する力がつき、回を重ねるごとに内容もいいものに変化していった。

けれども何一つ強制ではない。行事に参加しなくてもいい、意見を言わない、ごろごろ読書しに来るだけでもいい、多様なこどもが安心して過ごせるように、活動に余白を持たせるように環境を整えた。

そしてできたルールはたった一つ「大人だけで決めないこと」である。

8. 育ち合いの場へ

児童館が居場所として定着した3年目の平成29年(2017)年7月頃、みんなにとって児童

館とはどんなところか、と聞くと、「第二の家のように感じている」「なくてはならないところ」という意見が聞かれるようになった。「ここではゲームをしていてもいいけど、先生たちと話していても楽しいし、友達もできる。」「ここがなかったら引きこもりになっていたと思う」という意見もあった。「ここに来なかったら友達にならなかった人がたくさんいる」という声も上がり、児童館があることでこども同士のつながりが新しくでき、ここが居場所として役割を発揮しているのだと実感した。

こどもの意見を常に聞くことで、児童館は自分たちの場所だ、意見を言ってもいいのだ、逆に意見を言わなくてもいい、目的なく一人で過ごしていてもいいという安心感と信頼感がこどもの中に定着していった。

こどもたちはその日常の中で、異年齢でのかかわりや学校ではない人間関係を築き、低学年は高学年に憧れ、中高生は進学しても立ち寄ってくれるようになり、赤ちゃんの誕生をみんな待ちわびるといったふうに地域でこどもたちが声をかけ合う育ちあい関係が生まれていった。それにより、自分が大人になっていくイメージを持ちやすくなっていったように思う。

一見ただのこどもの溜まり場に見えるが、そこにはたくさんの体験があり、それが経験に変わり、その数を増やす場所となっていった。地域の中に自分たちの居場所がある、放課後に行きたい場所があること、自分たちが受け入れられる場所があるという中で、こどもたちは意欲的に活動していくようになった。児童館という資源を存分に活用して、自分たちの育ちの環境をよくしていったのだ。

そして自分たちのやりたい遊びや挑戦したいことを実現するために、こどもたちによって環境がさらに整えられていった。

9. 事例

ここからは児童館が、こどもの声で作られた居場所になったことによる印象的な事例を紹介

する。

・A君と高校生

令和4年から5年（2022～2023）にかけての出来事である。Aくんは当時小学校5年生、生まれつきの病気により情緒的配慮が必要な児童であった。

学年が上がるにつれ、家庭で痲癩を起こし、家を出てしまうことがあり、家族も心配していた。どこに行ってしまうか家族も見当がつかず、児童館と関係機関で情報を共有していた児童である。そんなAくんと児童館でつながりのあった高校生が駅や地域の中、電車内または家から遠く離れた道路などで、A君を発見するたび説得し、安全を確保して、児童館に知らせてくれたことで事故を未然に防いだ事例だ。A君についてどんな配慮が必要かをよく知っていたことで適切な対応ができ、保護に至った。児童館を通じて異年齢でのつながり、子ども同士のネットワークができていたから成し得た事例である。

Aくんは現在中学生になり、児童館での子どもたちとの交流を楽しみに来館してくれている。

・タブレット端末の貸し出し

当館では2018年からタブレット端末の貸し出しも実施している。経緯はみんなで行き先のSNSを視聴したいという子どもの声からだ。職員間で検討を重ね、導入した。タブレットを貸し出したことで、子どもたちのインターネットの扱い方やネットリテラシー、視聴しているものの内容により、子どもの精神状態や抱えている課題が見えてきた。それにより、どんなアプローチをするとその課題が解消されるか、踏み込んだ支援につながるかなど新しい視点が生まれた。履歴は消さないというルールを徹底し、問題が生じた場合は、なぜそれを見たか、それを見ることによってどんな効果や弊害があるかを職員と子どもの間で話し合うきっかけになった。実は自分の端末でネット上でのトラブルに巻き込まれている、自宅でインターネットを禁止されていてイライラして、過激なものを探し

てしまうなどといった問題も把握でき、早期支援につながることができた。また、この取り組みによって、なかなか家から出なかったこどもが児童館に足を運ぶきっかけになり、これまでつながることができなかったこどもともつながることができるようになった。

・事務室開放

平成28年（2017）から職員がいるときは、事務室を出入り自由とした。特に中高生は事務室が開放されたことによって、学校・進学・恋愛や家庭のことなど思春期の揺れる胸の内を職員に話しやすくなり、課題を早期発見する場もなった。それにより、事務室は職員が事務作業をする部屋であると同時に子どもたちにとっての安全基地のような役割を果たしていった。実際に、ある不登校のこどもは、この事務室に来ることで外に出ることができるようになり、事務室にいる中高生や一人で来ている小学生と自然と交流を持ち、徐々に館内での活動の場を広げ、意欲と自信を取り戻した。課題を抱えたこどもも事務室ならいることができるという職員とこどもの関係性ができているからこそこの事例である。また、保護者にとっても事務室は入りやすい場所となり、雑談から相談につながる場面も多く見られる。そして事務室開放は、職員の相談援助の能力も必要となるため、相談スキルが向上し、より細やかな支援につながることができるようになった。

10. 地域とつながる難しさと改正児童館ガイドライン

子どもたちの居場所づくりは達成できていくのに反して、地域との良いつながり方を見つけれずにいた。開館当初、地域から「こどもの溜まり場を作るのは良くない」「ゲームを許すのはどうなのか」などネガティブな意見も多く聞かれ、わたし自身怖気づいてしまい、地域連携が思うように進まない状態の中で運営を続けていた。こどもの居場所があることで地域にどんな影響を与えているかが発信できていないことは児童館として地域に根づくためのもう一つ

の課題であった。それはわたし自身の、地域とこどもそして児童館をつなげるためのコーディネート力がなかったと言わざるを得ない。わたし自身が足を運び、こどもたちの代弁者として地域に発信できていなかったことは連携がうまくいっていなかった大きな要因と言える。

それでも地域の主任児童委員の方からの働きかけにより、平成 28 年（2016）には地域の青少年育成協議会に入ることができ、児童館の報告をする機会を持つことができるようになった。公民館のこども事業を協働で実施するなど、周囲からの働きかけによって地域とつながることができていた。

このような地域からの理解によって気づいたことは、いかに自分の視野が狭く、一方的で、頑なであったかということである。仲間に入れていただくことで、地域の中で児童館がどうあるべきかという視点を得ることができたのである。

そして、4 年目の平成 30 年（2019）10 月、改正児童館ガイドライン第 4 章 2 項の「こどもの居場所の提供」が児童館の活動内容に含まれたことで、自分たちの取り組みがより明確なものとなり、発信しやすく、理解を求めやすくなった。こどもの居場所として定着したことで支援が必要なこどもとつながることも多くなり、各関係機関や区役所担当課ともこれまでより活発に情報共有が行われるようになった。それによりソーシャルワーク機能も果たすことができるようになっていった。

そうして地域に出ていく自信をつけてきたところで、児童館は次の展開を迎えていく。

11. コロナ禍によって見えたもの

5 年目の令和元年（2020）3 月、世の中は未曾有の感染症下に突入した。児童館も例に漏れず、臨時休館を繰り返すことになった。遠方に出かけることが難しかったそのとき、地域の中でこどもたちが育つということに注目が集まったのだ。その中で開館方法をどうしたらいいか、どうするのが最適解かを地域と行政と共有し議

論していくことになった。小地域で展開する小型児童館としてここは重要な局面であると感じた。

臨時休館中も誰かとつながりたくて児童館の玄関に顔を見せるこどもたちが後を絶たなかった。そんな姿を見て、感染症の不安はあるものの、なんとか歩みを止めずに日常を維持する方法、開館する方法はないのか、と地域の方からたくさんの声をいただいた。

これまでわたしたちは日常を大切にした実践を積み重ねてきた。こどもたちにとって「児童館にいる」というだけで安心できる、少人数または一人で来館しても職員と話せる、そのやりとりこそが意義深い取り組みであった。それによって地域や行政に安全な運営方法を示すことができたのだ。開館当初のように行事メインの運営をしてきていたら、大きくやり方を変更せざるを得なかったと思う。

そして、いつでも職員がいる児童館は地域の方の散歩の立ち寄りコースとしてもこの時期活用され、世間話をしながらこどもたちの様子を間近で見てもらうことができた。

コロナ禍後半では、小規模の行事をやってみないかとお声がけをいただき、その実施に際し、たくさんのご協力を得ることができた。また、人数制限をした児童館活動をより豊かにするために、多くの地域の方々が遊びボランティアとして協力してくれた。将棋やボードゲームなど少人数でも遊べるものを通じて、閉塞的になっていた地域の方もこどもたちから元気をもらっていたのだと感じている。コロナ禍によって、児童館は地域とこどもがつながる場となっていった。

12. みんながつながる児童館へ

そしてコロナ禍が明け、児童館は急速に地域にひらけていった。その中で地域の方からの提案で子ども食堂をやれないか、というお話をいただいた。しかし児童館職員が食事を作って提供することは難しく一度はお断りした。そこで、それなら別の団体が入って実施するのであれば

どうか、と再度提案いただき、令和5年（2023）、岩室地域児童館ボランティア運営協議会りりふるの会が設立されたのだ。地域住民によって子ども食堂、学習支援、手芸教室などを実施する団体である。地域に住む30代から80代の方々により構成され、児童館と情報交換をしながら子どもたちの日常を支えている。既存の行事はもちろん、新しく取り組み始めた児童館運動会などの児童館事業も必ず共催として実施するようになり、事業自体も子どもからシニア世代までと一緒に活動することでお互いをより近く感じていけるようになった。中でも児童館運動会は地域住民も参加しやすいうようにプログラムを組み、子どもたちと一緒に汗を流し、競技に参加していただいている。

職員も地域の方と交流する中で地域のことをより深く知り、広い視野で児童館活動を考えられるようになったように感じている。りりふるの会設立により、児童館だけでは成し得なかった活動が実施されるようになり、その質も大きく向上したのだ。この活動には社会福祉協議会を通して、地元の高校も参加しており、高校生になってから児童館に通い始めるきっかけにもなっている。児童館のない地域からボランティアに来る高校生が自分の将来像に「児童館のある地域で子どもを育てたい」という想いがあるのを聞かせてくれた。地域とのつながりは子どもたちが描く未来にも影響を与えたのだ。この活動が深まるにつれ、PTA 行事への参加や地域の高齢者団体との交流など、他の地域団体との連携事業が増えていき、難しかった地域との連携をようやく実現することができた。それと同時に職員もボランティアの育成支援や活動支援という新たな分野の業務に関わることもでき、地域の方との情報交換があるという光景が児童館の日常に追加された。

13. そして今

岩室地域児童館は地域に根付き、子どもたちにとって児童館があるのが当たり前になった。地域の中に居場所があることでたくさんの体験

と経験を職員と子ども、地域ともに増やしている。児童館が子どもたちの日常の中にあり、行事も豊かなものになり、やらされる行事ではなく自分たちでやる行事に変化した。

あの頃、わたしたちとともに児童館のあるべき姿を、この地域で児童館がどのようになっていったらいいかを考えてくれた子どもたちは中高生・若者世代になりこの令和を生きる子どもたちの日常を支えてくれている。若者世代にとって自分の子ども時代に児童館があったこと、そこでたくさんの経験をし、育ち合う仲間に出会えたこと、職員に自分の声を受け止め続けてもらえたこと、そんな経験が彼らの目線に地域に向かわせているのだと感じている。

コロナ禍を通して地域での子どもの過ごし方、子育ての課題が浮き彫りになった。オンラインでいくらでも外の世界とつながることができるからこそ、リアルでのつながりは子どもたちの育ちにとって、より濃く、より意味を持つものとなっている。児童館という選択肢があるからこそ、昼間は児童館でみんなと遊んで、夜はオンラインで遊ぶというようにバランスをとって遊んでいる様子が見られる。

先輩たちが作ってきた児童館の歴史を引き継ぎ、高学年が低学年に児童館の利用の仕方を伝えていっている。自分たちが過ごす自分たちの場所を自分たちで守る、そんな意識が子どもたちの中で育っていっている。児童館での過ごし方も子どもたちの中で時代に合わせ、アップデートを繰り返しながら作られている。

未就学の幼児にとっても、一人で来館する小学生は憧れであり、保護者にとっては我が子の成長に見通しが持てるような姿が児童館から発信されている。幼児が来館しているとき、どう遊んだら安全かを小学生が考え、小学生が中高生と一緒に遊んでもらうのを楽しみにし、中高生は小学生たちに当時の自分を思い出しながら、様子を気にしてくれている。その光景は初めて来館する方が一番驚く部分である。

今年度からは部活動の地域移行に伴う活動にも児童館が関わるようになり、小・中学校とも

より良い形で子どもたちの放課後を考える機会を持つことができている。児童館部として児童館でのリーダー活動、文化活動を部活のようにできないかという議論も沸き起こっている。地域全体で子どもたちの放課後を考え、その環境整備をしていく、そんな取り組みが始まっている。

出張児童館として児童館のない地域に出向く機会も多く設け、こどもの居場所づくりのノウハウを地域に波及させる人的資源としても児童館の役割を発信している。

14. 終わりに

2024年、岩室地域児童館は10年目を迎えた。

子どもたちとの対話の中で居場所づくりに取り組んできて、常にあった想いは、どんなときも子どもをまんなかに実践を進める「覚悟」だったと感じている。そして児童館とは地域の一部であり、地域の未来を作る場所の一つなのだとつくづく感じる。子どもたちの意見を実現するために安全管理や環境整備、地域からの理解を求めていくこと、そして子どもへの深い理解。それを伝えていくことができる自分であること。子どもたちの誰もが持っている主体性を引き出す関わりとは日常の些細なところにあること。この実践の積み重ねで見えてきたものは「欲しかったのは豊かな日常」であったということだ。目まぐるしくあるイベントより、自分らしく育てる地域、真正面から向き合ってくれる大人のいる日常こそ、彼らが望んだものだった。子どもたちと共にあったこの実践は、他の誰でもない子どもたちが成し得た場づくり実践だと感じている。わたしたち大人がしたことはその場を開け続けること、安全と安心を守ることだ。それを教えてくれた彼らもう大人になった。どんな時もわたしに進むべき方向を示してくれたのは子どもたちだ。子どもたちが作る地域の未来が見たい、だからこそわたしの実践はこれからも続く。

そしてこの実践がいつか地域のものとなり、特別なものではなくなくなっていくことを望んでい